



よろいを着た古墳人 出土状況

5 世紀中葉～6 世紀初頭
金井東遺跡
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

うつ伏せになり、脱いだかぶとの上に頭を載せている状態で出土しました。写真左方に頭部がありますが、後頭部は消失しています。頭蓋骨の形状・歯の化学分析などから、この人物は40代の男性で、顔は細くて高く、眼窩が高く、鼻が細い、いわゆる朝鮮半島南部の渡来的形質を持っており、幼少期を関東より西方で過ごしたと推定されています。また、精巧なよろい、豪華な所持品からもこの人物の性格がうかがえます。

古墳時代のよろいが発見される時は、たいてい古墳の石室内で見つかる場合がほとんどですが、写真のように着用状態で見つかる例は国内では初めてです。

金井東遺跡は、6世紀に榛名山の噴火により埋没したことから、「日本のポンペイ」といえる遺跡です。被災直前の様子が火山灰・火砕流などでパッキングされており、古墳時代の人々の生活・行動を復元できる世界でもまれな遺跡といえます。

(特別展「発掘された日本列島2018」にてレプリカを展示

【会期 平成30年9月22日(土)～10月31日(水)】

特別展

発掘された日本列島 2018

2018.9.22(土)～10.31(水)

日本国内では、毎年8,000件近くの発掘調査が行われ、数多くの成果が日々蓄積されています。これらの成果は、文献ではわからない、各地域の文化や歴史を物語るものとなります。しかし、件数が多すぎるがゆえに、様々な報道を通じてでも多くの方が実際に接することができるのは、残念ながらごくわずかにすぎません。

この展覧会は、特に近年全国的に注目された発掘調査の成果を、分かりやすくご覧いただくものです。

1 新発見考古速報

旧石器～近代まで、広く注目を集めた17遺跡を紹介します。



山形土偶（中央）とみみずく形土偶（両端）

縄文時代後期

特別史跡 加曽利貝塚（千葉県千葉市）

千葉市立加曽利貝塚博物館

顔の形がその名に由来する、山形土偶。胴体には大きな胸とお腹が強調されており、女性をかたどったものだと考えられます。中央を縦にはしる線は、妊娠後期に現れる正中線でしょうか。

山形土偶・みみずく形土偶ともに、このころ関東地方でさかんに作られました。



武人埴輪（右端）と巫女埴輪（他3点）

古墳時代後期

神田・三本木古墳群（群馬県藤岡市）

藤岡市教育委員会

墳丘を土ではなく川原石を積み上げて造ったK-10号墳の石室入口近くで出土しました。これらを含む計27個体の埴輪が墳丘を取り囲むように配列されていました。



銅造観世音菩薩立像

白鳳時代後期

史跡 武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡（東京都国分寺市）

国分寺市教育委員会

武蔵国分尼寺の調査の際、僧寺と尼寺の間を南北に走る東山道の武蔵路（上野国（群馬県）から武蔵国府（東京都）にいたる道路）から発見されました。

その体躯の特徴から白鳳期後半の仏像だと考えられていますが、国分寺は8世紀中ごろ以降の寺院のため、その関連性が注目されています。

2 特集 装飾古墳を発掘する！

全国に存在する古墳の中には、石室の壁面やその内部に設けた石棺に彩色・線刻・浮彫により人物や動物、幾何学模様等の文様を施したものがあり、これらは装飾古墳と呼ばれています。その数は国内で600基を越え、西日本を中心に東北地方南部まで広がっており、特に九州地方に多く分布しています。造られた時代や地域によって装飾の内容に変化がみられることから、古墳時代の死生観や葬送儀礼、地域差を知る上で大変価値があります。

このコーナーでは、そうした装飾古墳の持つ魅力を、保存への取り組みや、先の東北や九州における震災による被害からの復旧活動とあわせて紹介します。



装飾古墳の石室復元 写真（後室）
古墳時代後期
特別史跡 大塚古墳（福岡県桂川町）
桂川町教育委員会

昭和9年の発見当初「我が国随一を誇る嘉穂の壁画古墳」と報道され、多くの見物人が訪れたことで知られています。

石室は前室と後室からなる横穴式石室で、赤・黄・黒・緑・白の5色を使って、人物・馬・刀・盾や、同心円や三角形など幾何学的な文様が施されています。

現在は温度・湿度変化防止のため、保存施設が設けられています。

本展ではパネルにてご紹介します。



装飾付須恵器
古墳時代後期
皆見大塚古墳（福岡県みやこ町）
九州歴史資料館

本体側面にある小壺の間に鹿・猪・鳥の像が飾り付けられています。これらの動物は当時の狩りとの関わりを彷彿させます。

3 地域展示「発掘調査員の見方！

—県内遺跡の最新調査より—

発掘調査で出土品や人々のくらしの跡が発見された時、それらがどのようなものであるか判断するのが発掘調査員。ここでは、最近5年間に行われた県内遺跡の発掘調査の中から、「発掘のプロ」がどこに注目して考察しているかを紹介します。



扇子の骨
平安時代末～鎌倉時代初頭
興福地遺跡（岐阜県大垣市）
岐阜県文化財保護センター

中世の扇の骨の樹種はスギやヒノキの例が多く知られていますが、これはトウヒの仲間です。井戸の跡から見つかり、使用しなくなった井戸を廃棄する際に行う儀式で使用されたと考えられています。

歴博セレクション

美濃の茶陶 —美濃古陶会コレクションより—

2018.11.10(土)~12.9(日)

美濃は古代より焼物の生産地としてさかえ、特に桃山期は志野や織部に代表されるように、茶湯の隆盛とともに美濃陶が全国的に大流行しました。



志野水注 (岐阜市歴史博物館)

歴史博物館でも、これまで多くの機会をとらえ展覧してまいりました。企画展「織部～陶片の美～」(昭和62年)、特別展「桃山の茶陶－黄瀬戸・瀬戸黒・志野」(平成元年)をはじめ、特別陳列「美濃桃山陶と美濃焼再興」(平成16年)などの展覧を重ね、他にも折にふれて特別展・企画展などで紹介してまいりました。

これらにあわせるように、歴史博物館では開館以来、美濃の歴史をあらわす重要な資料として美濃陶を蒐集してまいりました。



鼠志野大鉢 (個人)



黒織部茶碗 (岐阜市歴史博物館)

また、美濃の茶陶は今日においても人気の裾野は広く、個人コレクションにも優品が多くみられます。このたびは、熱心な愛陶家が集う美濃古陶会のコレクションをあわせてご覧いただけます。

「志野水注」には、愛らしい瞳が印象的な木菟文が鉄絵で描かれています。何か今日のなキャラクターのようにもみえます。

一方で、「鼠志野大鉢」には野草が墨絵のように描かれています。鬼板(鉄分の多い赤土)のグレーをバックに掻き落して描かれた白の文様が引き立ちます。

「黒織部茶碗」では、より一層、白と黒のコントラストが目を引きます。急冷により黒色を呈す鉄釉を掛け残した長石釉の白を山路に見立てています。やや歪んだ形が侘びた趣向を感じさせます。

「美濃伊賀水指」は明確に意図的に器形を歪めています。こうした“ひょうげ”は桃山期美濃陶の大きな魅力のひとつです。

大胆で多彩な華やぎをみせた桃山文化のなかで育まれた茶陶を中心に、美濃陶の魅力をご堪能いただけます。



美濃伊賀水指 (個人)

企画展

ちょっと昔の道具たち

2018.12.25(火)～2019.3.10(日)

今年で23回目を迎える展覧会。本展は、小学校3年生の社会科単元「古い道具とむかしのくらし」と連携し、今と昔の生活の違いや変化、昔の人々の生活の知恵を紹介します。また、「具体物を通して」学習する場を提供し、体験やジオラマ方式の展示形式で、「見て・聞いて・触れて楽しく」学ぶことを目的としています。また会場内には、20代～90代と、さまざまな世代のものしり博士が各コーナーで解説や体験補助を行っており、毎年ご好評をいただいています。

展示コーナーでは、「学校」「まちかど」「家のなか」「家のまわり」があり、いずれも児童の生活に関連した4場面を設定しています。「学校」「家のなか」は80～60年くらい前、「まちかど」「家のまわり」は60～40年くらい前の時代設定とし、ジオラマ形式に資料を展示することで、当時の様子が理解しやすいよう配慮しています。このほかに、様々な道具の変遷がたどれる「道具のうつりかわり」があります。

本展では、展示内容や見学方法等について、岐阜市小学校社会科研究会の先生方と開催する博学連携委員会において協議するとともに、来館者アンケートも参考にしながら毎年見直しを行っています。

平成28年度から開始した「思い出の写真コーナー」は、大変ご好評をいただいております。今年度も掲示と写真募集を継続します。写真は、昭和20年代～50年代初めごろ、岐阜市近辺で撮影されたものを主な対象とし、博物館への持参を原則としています。また写真原本は返却します。会期中は随時、お持ちの写真のご提供を受け付



学校団体見学時の様子



糸つむぎ&綿くり体験の様子

けていますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。

なお、土曜・日曜・祝日には「おもちゃ作り教室」、「ものしり博士のわくわくワークショップ」、お手玉大会など、各種のイベントがあります。世代ごとに様々な見方が味わえる「ちょっと昔」を、ぜひご家族でお楽しみください。

【関連行事】

<一般来館者向け>

○昔のおもちゃ作り教室

(各日曜日 午前11時～午後2時～)

1月6日「羽子板ストラップ」[300円]・1月13日

「親子でチャレンジ!布で作るつり小花のストラップまたは小花のヘアピン(2個)」[800円]・

1月27日「うぐいす笛」(11:00～、14:00～)[200円]・

2月3日「親子でチャレンジ!布で作る小花のストラップ」[800円]・

2月10日「myおひなさま」[200円]・

3月3日「都どり」[500円]

※[]は材量費、各回定員先着20名(「親子でチャレンジ!○○」は各回先着10名)、開始30分前より整理券を配布します。

○ものしり博士のわくわくワークショップ

(各土曜日 午前10時～12時と午後1時～3時)

1月5日、12日、19日、26日、2月2日、9日、

23日、3月2日

○みんなあつまれ!お手玉大会

2月24日(日) 午後1時30分～

○糸つむぎ&綿くり体験

講師:ものしり博士のみなさん

2月9日、23日、3月2日の各土曜日 午後1時～3時

○ものしり博士の昔の遊び教室

2月16日(土) 午前10時～12時と午後1時～3時

※展覧会観覧者は当日自由にご参加いただけます。

<学校団体向け>

■たぬきの糸車 SPECIAL DAYS

1月31日(木)・2月1日(金)・14日(木)・15日(金)

※都合により内容・時間等が変更になる場合があります。

※平成30年度学校団体見学の申し込みは、各日満員となりましたので、受け付け終了しました。

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一 素描の魅力

2018.10.2(火)~12.27(木)

「素描」はモノづくりをする作家にとって題材の構造を確認したり、その魅力を引き出す手段を選択したり、あるいは制作の道筋を立てたりする上で基礎となる大切な勉強方法です。感性を磨くためのトレーニングという考え方をする作家もいます。

百科辞典を引くと「フランス語ではデッサン、英語ではドローイング」と説明されていますが作家の間ではスケッチは題材を見て描く素描、草稿やアイデアなどを描いた素描をドローイングと言い、木炭、鉛筆、ペン、コンテなどを用いて、主として線で描くこと、あるいは描いたものを指します。一般に表現技術の訓練や彩色を目的とした下絵のことを言いますが、素描自体を独立した作品として解釈することもあります。

「デッサンの狂いを治すことから制作が始まる。」と言われるぐらい素描は制作の第一歩で、師匠がスケッチやデッサンをとおして弟子の力量を見極めて指導方針を示すことは、この世界では常識になっています。

加藤栄三・東一は「素描の達人」といわれ多くの美術関係者から高い評価を受けました。

加藤東一は、素描について次のように語っています。



加藤栄三「雨の龍安寺」



加藤東一「起し太鼓」

「鶺鴒とか祭りなど人の動きのあるものの場合には目で追っかけないで、動作などを頭の中に印象づけて描く。」

動いている題材を捉えるとき、輪郭線を追いかけるのではなく力点や構造を見抜きながら、イメージを合わせていきます。そのため、瞬時にイメージ表現できるパステルやコンテ、木炭、あるいは墨といった色や形を塊で表現できる画材を多く用いて描いていきます。

あわせて題材のイメージをより強く表現し伝えるために、題材を見た時に受けたイメージ色に適した色画紙を使うことによって、ダイレクトにかつ瞬時につかんだイメージを画面に表すことが可能になり、見る者に感動をあたえてくれます。

栄三も素描について「対象環境により水彩、鉛筆、パステル、コンテなどを自由に使い繰り返し繰り返し描きます。そのうちに創作への意欲が次第に盛り上がってきます。私は懸命に写生に打ち込むことによって新しい自分の道を切り開いて行きたいと考えています。」と語っています。

本展で、収蔵作品の中から栄三・東一が本画制作のために描いた素描と旅先や画室など様々な状況の中で描いた素描を中心に展示します。

題材と対峙しながら二人の兄弟画家が何を見て、何を伝えたかったか、今一度確認して下さい。

「博物館だより」100号を迎えて

小誌は御陰様をもちまして、今回で通算100号を迎えることができました。これもひとえに皆様方の御支援、御協力の賜物と厚く御礼申し上げます。

当館は昭和60年11月に開館致しましたが、それを遡ること3年前の昭和57年1月に小誌の前身となる「仮称岐阜市歴史博物館建設ニュース」を創刊し、昭和60年3月に第10号を発刊した後、「博物館だより」と名を改め、同年8月に第1号を刊行しました。その巻頭言「開館を控えて」で小川弘一館長は「市民に開放された、市民の利用しやすい、市民のための内容豊かな」博物館を目指す決意を述べています。この方針は今も変わることなく受け継がれ、当館の運営の根幹の一つとなっています。また、展覧会案内、研究ノート、利用案内などの内容も基本的に現在と同じであり、一貫して市民の皆様へ博物館活動と地域の歴史の紹介を行ってまいりました。一方、当初B5版モノクロ8ページだった仕様は、平成4年4月の第21号から表紙・裏表紙をカラー印刷とし、平成9年8月の第37号からは判型をA4版に改め、昨年6月の第96号からはオールカラーとし、解り易い誌面作りを進めてまいりました。今後も皆様と博物館を結ぶ定期便として、御愛読いただければ幸いです。



■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌6ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

- 10月2日(火)～11月11日(日) 創立65周年記念 岐阜形象派展
11月13日(火)～12月27日(木) ニホンガノキズナ 黎明×瑠瑠
1月5日(土)～3月3日(日) ぎふ次世代の作家展

■特集展示(2階 総合展示内)■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

- 9月14日(金)～12月9日(日) 暮らしの道具たち～戦前の家のなか～
12月14日(金)～3月17日(日) 岐阜の年中行事～受けつがれる祭り～

■分室 原三溪記念室の展示■

- ～9月28日(金) 古地図に見る柳津
9月29日(土)～11月16日(金) 青木家の暮らし
11月17日(土)～2月28日(木) 林 晃三

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。



館蔵資料紹介



長良川鵜飼之図

狩野晴真

絹本着色

時代：江戸時代後期

寸法（画面）：75.5×132（cm）



天保14年（1843）、尾張藩12代藩主徳川斉荘が岐阜に御成時に行われた上覧鵜飼の様子を描いた作品です。

作者の狩野晴真（?～文久2年〈1862〉）は、代々尾張藩の御用絵師を務めた神谷家の出身で、弘化2年（1845）に神谷姓から狩野に改めました。晴真は、江戸の木挽町狩野家9代晴川院養信の門人として絵を学び、文政6年（1823）に絵師として尾張藩に召し抱えられました。

題材であるこの時の上覧鵜飼の様子は、同じく晴真が絵がらみを描いた作品を、当館で所蔵しています。本作品においても、通常の長良7艘・小瀬5艘以上の船数を確認でき、藩主上覧時と分かります。御用絵師は、藩主の御成などに同行し、その道中をスケッチしました。実景に基づいたと思われる表現などから、本作もそのような工程を経て作品に仕上げられた可能性が考えられます。



利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日（月曜日が祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月28日～1月3日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

- **観覧料**（団体は20人以上）
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円（団体240円）
小中学生 150円（団体90円）
両館共通で観覧される場合
高校生以上 510円（団体410円）
小中学生 250円（団体150円）

◎下記の方は無料で観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

- ①岐阜市在住の70歳以上の人
- ②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護の方1人

- ③岐阜市内の小中学生
- ④家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生
以下の人と同伴する家族（高校生以上）の方
※企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
※特別展は、その都度料金を定めます。

- **交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.100 2018. 9

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

（分館）加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410